

志方町散策

歩いてまわれるコースで名所旧跡を紹介する散策シリーズ。
東に城山、西に高御位、北に大藤山、三方を聖なる山々に囲まれた志方の街を東へ西へ歴史と自然を肌で感じながら、楽しみながら…。
加古川再発見に、さあ、出発！



コース 所用時間 3時間02分 14.3km

志方公民館

2.9km
43分

長 楽 寺

2.7km
40分

谷の地蔵さん

3.3km
49分

安 楽 寺

3.5km
52分

志方八幡神社

1.5km
22分

大 塚 古 墳

0.4km
6分

志方公民館

志方町 散策

「志方」地名の由来

神功皇后が三韓征伐に行かれたとき、この地に上陸され今の宮山に登られてたくさんの野鹿が田野の間に群れ遊ぶのをご覧になって「あなおもしろ、鹿田とは名づけまし」と嘆賞されたのに因んで、鹿田と称するようになり、後に志方と改めたといわれています。(志方町誌)



長楽寺

木造延命子安地藏菩薩半跏像(重要文化財)を本尊とする浄土宗寺院。高倉帝が日本66州の一国に一体安置したとされる木造延命子安地藏菩薩半跏像は、「谷の子安地藏」として安産祈願が絶えません。



志方八幡神社

天永2年(1111)宮谷に創祀され、明応元年(1492)現社地に奉遷して八幡神を勧請しました。古来厄除安産の神として、また交通安全の神として崇敬が高く、播磨三社八幡の一つに数えられています。また江戸以降明治初期まで秋の祭礼には奉納行事として能楽が催されていて「あの能志方の能、宮に能、能が能、あるとい能」という民謡によっても能が盛んだった事が想像できます。

現在も境内に能楽堂がありますが、当時の建物は現存せず、再建後のお堂です。



(志方八幡神社 能楽堂)

胡蝶の舞

世界平和を祈って舞われるもので、毎年10月の神幸式で舞いが奉納されます。正式名称は「和光楽」といい、新しい型の舞楽です。

また、印南郡誌では「志し来りし方」から「志方」と改めたという説を紹介しながらも、こじつけのきらがあるとし、「越し方」の約音ではないかと私見を付け加えています。

谷の地蔵さん (お話)

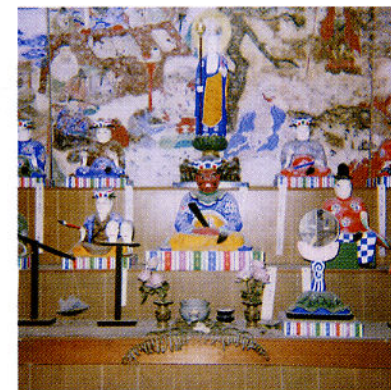
ずっと昔の冬のある夕暮れのこと、坂の西の方から山沿いに歩いてきた一人の六部さんがありました。大きな風呂敷包みを大事そうに背負い、いかにも疲れたような足取りで坂を下り、村へ入ると道端の石の上に腰を下ろして休んだ後、やがて腰をあげ、東の方へ歩いて行きました。その次の日から不思議な事が起こるようになりました。その六部さんが休んでいた日暮れ時刻になると、例の道端の石の前を通る人の耳に、どこからともなく「わしは谷の地蔵じゃ。」とささやくような声が聞こえるのです。



日が経つにつれて声を聞いたという者が増え、「六部さんが背負っていたのは、谷の地蔵さんにちがいない。」とか、「あの六部さんこそ地蔵さんだ。」など噂が噂を呼びました。そして何れにしてもこれは谷の地蔵さんがこの村に教化をたれるために六部さんをつかわし、あの石にのりうつられたのだ、ということに皆の意見が一致しました。それ以来、その石を谷の地蔵さんの分身としておまつりし、村の年中行事として毎年地蔵盆を行うことになり、今日までつづいています。



(木造延命子安地藏菩薩半跏像)



(安楽寺 十王堂)

安楽寺

阿弥陀如来を本尊とする浄土宗寺院。もとは真言宗寺院で弘法大師の弟子の真紹上人が山頂に無量寿院を創建(811)したのに始まり、本光山中道寺と改号し、長らく山頂にありましたが、領主赤松入道円心則村の四男、氏則が山頂に城を築く際(1380)山麓に移しました。その後、赤松氏が衰退し孝橋氏が三好長慶に敗れ落城の際に兵火のため消失し、数年後、志方城主櫛橋氏によって浄土宗寺院として再建されました。